Chap.11 伝統的町家における住み方

§11.1. 昔の住み方

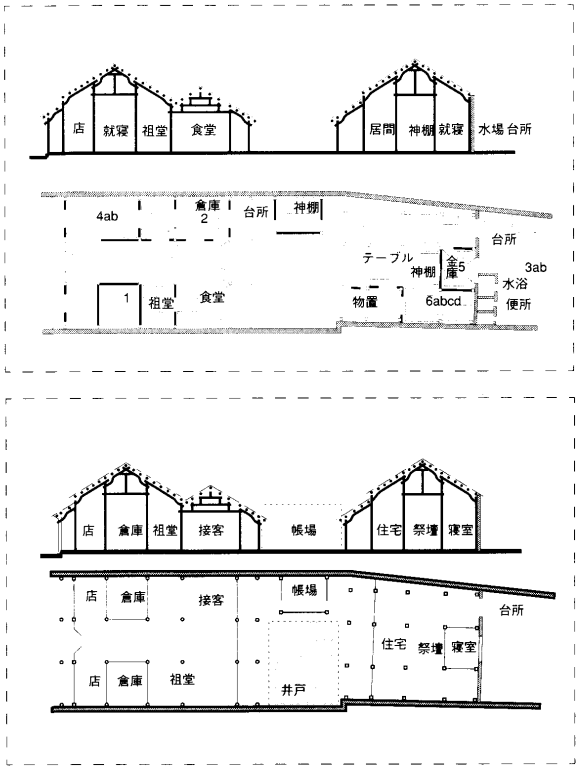


Fig. 11.1: チャンフー48番の住み方（上：現在、下：昔）

まず、伝統的建物における住み方がどのようなものであったかを明らかにしよう。ただし建てられた当初の商業形態が崩れている今ではこれは聞き取りによるしかない。そしてそれはあまり成功していない。日本の町家でも同じことだが、ひとつの理由は建物の内部空間が融通無碍にできており、居間、寝室など明確な区分がそもそも困難なのである。それでも大まかなゾーニングはできる。再びチャンフー48番に登場を願おう。

この建物には66歳の当主を筆頭に現在12人、親戚関係にある6家族が生活している。家族の内訳は、1人だけが3、あとは夫婦に子供1人、夫婦に子供2人、母のみに子供1人だ。夫婦に子供1人の家族は、最奥部に新しい棟を建てて生活している。図11.1に見るように、各家族は建物を適宜仕切って分割使用している。炊事もバラバラに行なわれているようである。もちろんこれは本来の住み方ではない。聞き取りに想像を加えたかつての住み方は次のようなものだ。

まず基本は前家が商売のための空間、後家が生活のための空間である。橋家は帳場として使っていたとのことだ。前家の道路側第1スパンは店舗である。第2スパンは仕切られており、商品倉庫のような役割を果たしたのであろう。ここは棟の下だが、根太天井があり屋根裏も倉庫として使えるようになっている。第3スパンの中庭側には祭壇が設けられている。子棟の中庭側は接客に用いられた。後家は一番奥の中央に囲まれた部屋があるほかは間仕切りはない。この部屋には窓があり、あるいはわが国の民家の塗籠篭唯一の個室であった可能性がある。中庭側の柱間中央には現在椅子とテーブルが置かれているが、このゾーンはかつても家族の居間的な空間であったのだろう。奥の個室の壁の中庭側には祭壇が置かれていた公算が強い。

ベトナムでは、1坪ほどの板の台をベットに使う（そこに蚊帳をかける）。この台は時には就寝時以外にも活用される便利な移動式の床である。逆に言えばどこでも寝室になるのである。一般には建物の入り隅に置かれてそこが寝室になるが、気候によっては風通しの良い中庭近辺へ移動することもあるのである。また昼間は商業空間である前家も夜は就寝の場として使われる。炊事は最後部の庭に面する釜家で行なわれる。ここにはまたトイレや洗面所、シャワーが設けられている。

2階建てでは、前家の2階はもっぱら倉庫に用いられた。多くの場合、2階の床には荷物を上げ下ろしするための穴があいている（チャンフー80番）。四天柱の間設置されていた祭壇は2階へあげられる。このことは2階建てで次第に柱の配置が崩れていくことと大きな関係があるだろう。

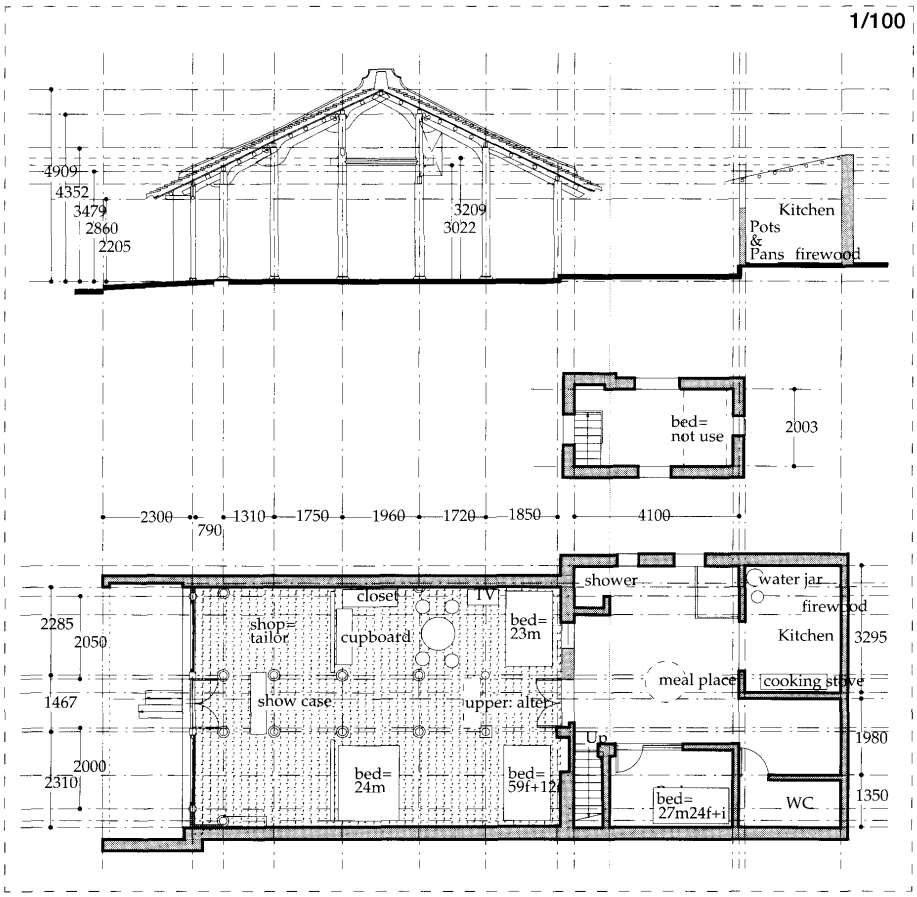
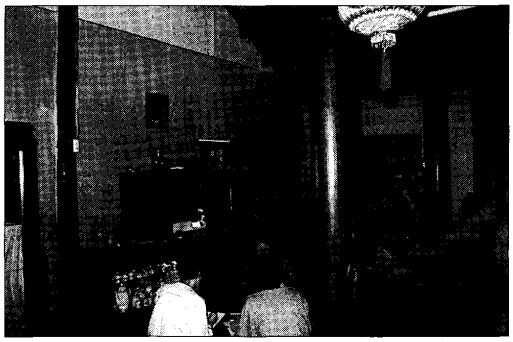
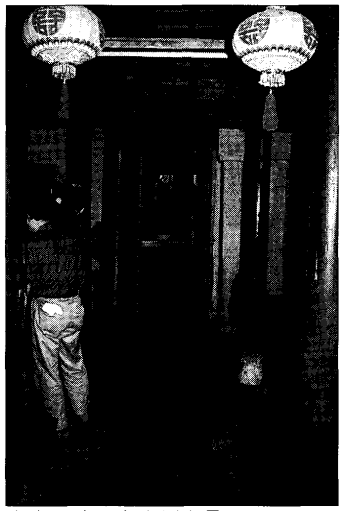


Fig. 11.2: 伝統的建物における住み方例
(チャンフー102番)

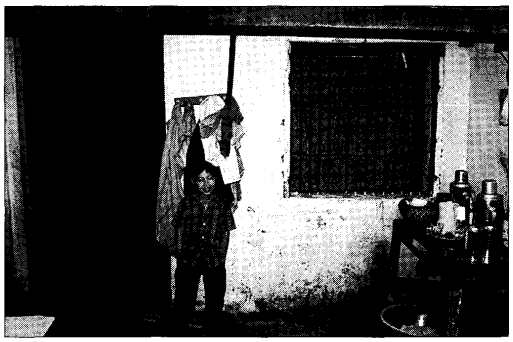


母屋の西側、中央にテーブル、奥の壁際にはベッド



中央通路、中庭側を見る

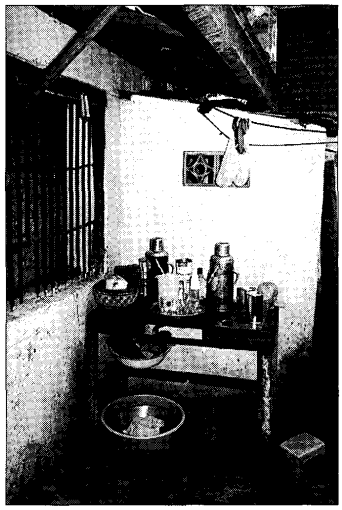
母屋の東側、キャビネットを挟んで入り隅にベッド



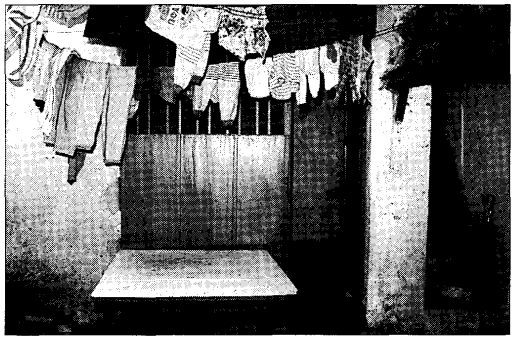
中庭南側、母屋の後ろ壁、左に2階への階段

中庭西側、左シャワー室、井戸とタンク、右に台所

中庭北側、左が台所、右が物置、その奥にトイレ



中庭右が母屋、正面がシャワー室



中庭東側、個室と食事用テーブル、右に2階への階段

§ 11.2. 伝統的建物における現代の住み方

11.2.a. 分析にはいる前に

まずあまり改造等のなされていない伝統的町家の中で現在の人々がどのような生活をしているかを把握しよう。日本の町家にも言えることだが、住み方の傾向を掴むことは大変困難である。町家と言っても形は様々で同規模ではなく、家族構成、店の有無によっても異なってくる。もともとの規模が同じであっても敷地が分割されるなどして形が崩れている。その上、日本の住習慣がヨーロッパのように機能を固定しない以上に、ベトナムでは空間の機能が固定されていないように見える。部屋の用途は時間によって変化する。就寝場所はベッドとともに移動しうるし、空間を規定する間仕切りは簡略であることが多い。しかしながら一般的な傾向は読みとることはできる。

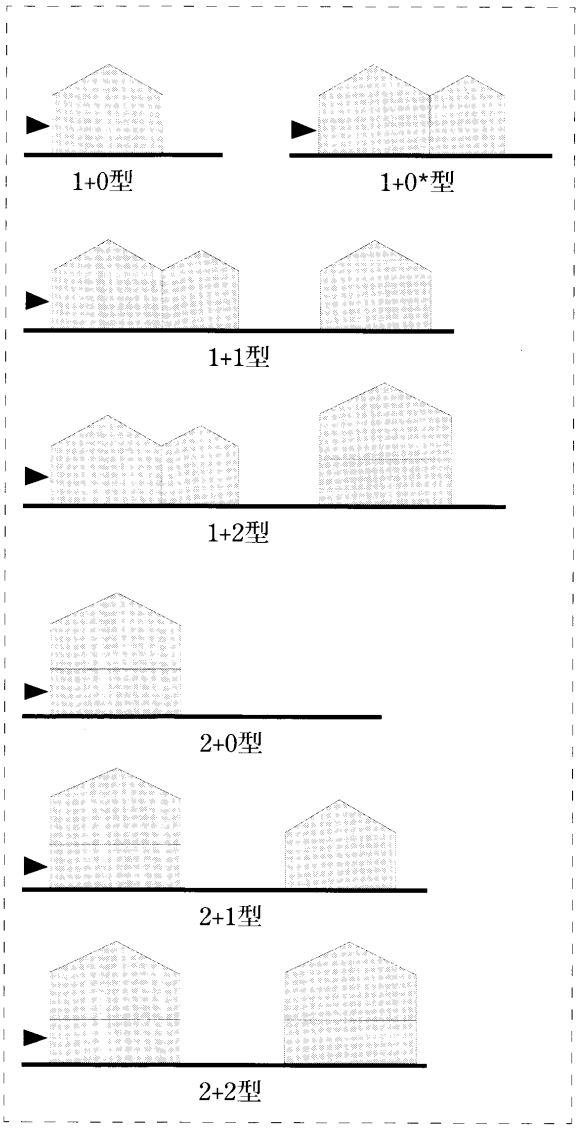
課題は、建物の規模・形式等ハードな要素と、家族の規模・生業等ソフトな要素とのマトリックスを作ることである。そこでまず前者に関して、伝統的町家を編年に関係なく建物の規模で以下のように分類しよう（図3-1-1）。

1. 前家が1階建てで親棟のみで構成されるもの ..... 1+0 型
2. 前家が1階建てで親棟・子棟で構成されるもの ..... 1*+0 型
3. 前家・後家ともに1階建てで構成されるもの ..... 1*+1 型
4. 前家が1階建てで後家が2階建てで構成されるもの ..... 1*+2 型
5. 前家が2階建てのもの ..... 2+0 型
6. 前家が2階建てで後家が1階建てで構成されるもの ..... 2+1 型
7. 前家後家ともに2階建てで構成されるもの ..... 2+2 型

ただし、1*+2 型と 2+1 型については原型をとどめる事例が少ないため傾向を掴むことはできなかった。

空間の使い方に関しては、店(Shop)、作業場(Workshop)、居間(Livingroom)、就寝(Bedroom)、祭壇(Altar)、台所(Kitchen)、水場(Sanitary)の計8つに分類しておく。ホイアンの伝統的住宅は前家後家ともに3間×3間のグリッドが基本になるので、それらを上記のゾーンに塗り分けながら考察を進める。以下は、それら塗りわけの結果を建物規模ごとに整理したものである。

Fig. 11.3: 規模による伝統的建物の分類



11.2.b. 前家（1階建て、子棟なし）における住み方

1. 店を営む場合、第1スパンまでが店に使われ、第2スパンまで店に使っている家は少ない。第2スパンは祭壇と居間に使われる。第2スパンに就寝空間が配置されることはあまりない。第3スパンはほとんど就寝空間として使われる。基本的に通り側から店→居間→就寝空間と変化し、公から私へのヒエラルキーを作っている。動線は中央にあり、それを挟んで両側に就寝空間が配置されるが、3方向は囲まれても動線に向かっては開放されている。家族内でのプライバシーはさほど気にはされていないようだ。一台のベッドには複数の人が就寝することが多い。ただし、子供のうちの誰かが世帯をもつようになると、老主人世帯は母屋に就寝空間を置いたまま、若い世帯は橋家等に就寝空間を移す。世帯間の就寝分離がひとつの原則になっているように思われる。
2. 店を営まない場合は1例しかないが、第1スパンが就寝に使われている。店を営む場合と違って家の中に外部の人が入ってくることはあまりないからであろう。第2スパンは居間に使われる。第3スパンは再び就寝として使われている。つまり居間を中心に各コーナーが就寝に使われている。主人は中庭近くのコーナーに就寝空間を置いている。中央に動線が取られ、間仕切りはほとんどない。
3. 食事には台所付近の中庭があてられている。時により屋内で食事をすることもあるがこれといって決まった食事室といった場所があるわけではない。
4. 便所・水浴び場は家の敷地の最も奥のコーナー、台所はどちらかの袖壁沿いに配置される。
5. 3世帯が居住する例はこの型の住宅では見られない。3世帯以上が居住するには前家を改造するか、中庭に増築せざるを得ない。

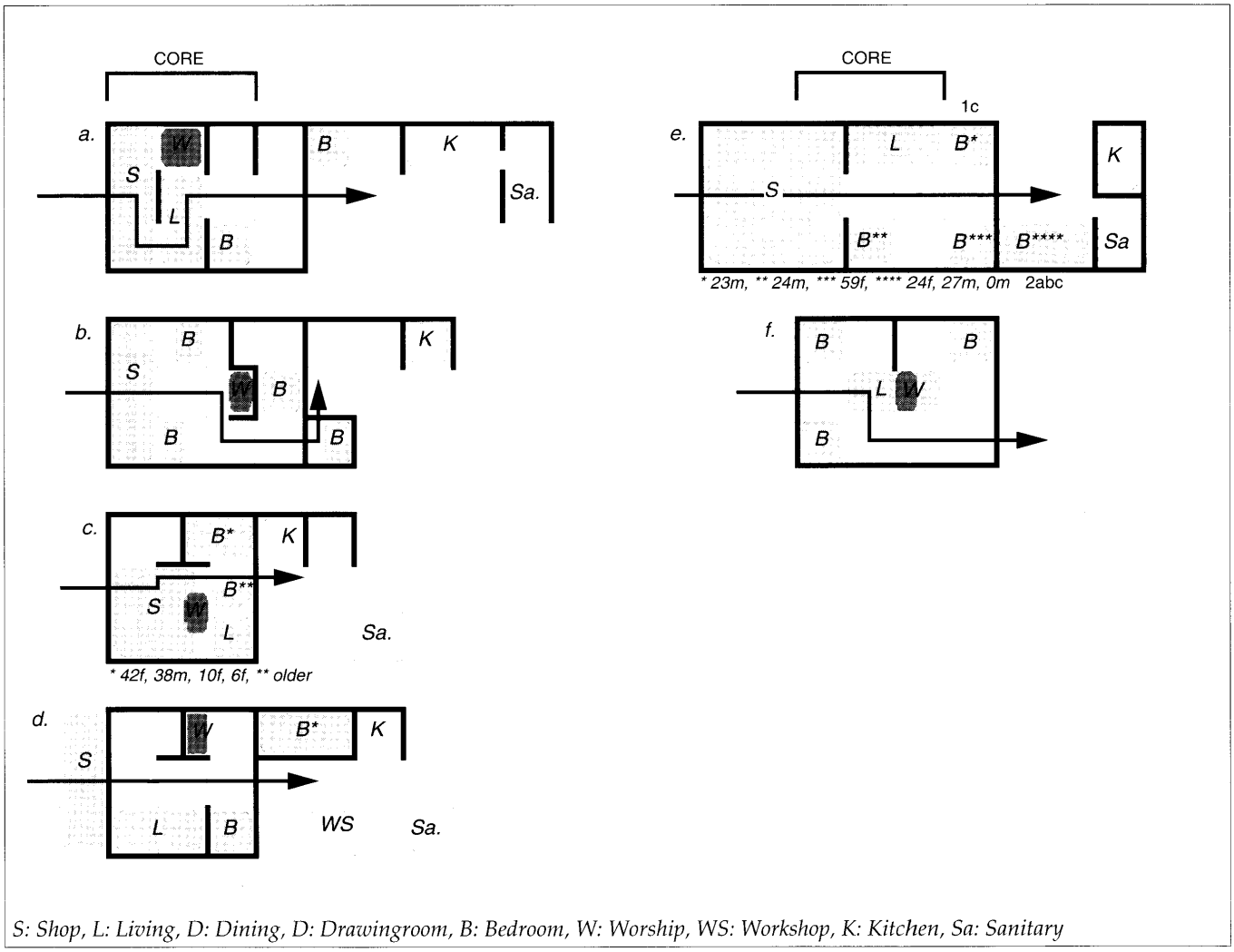
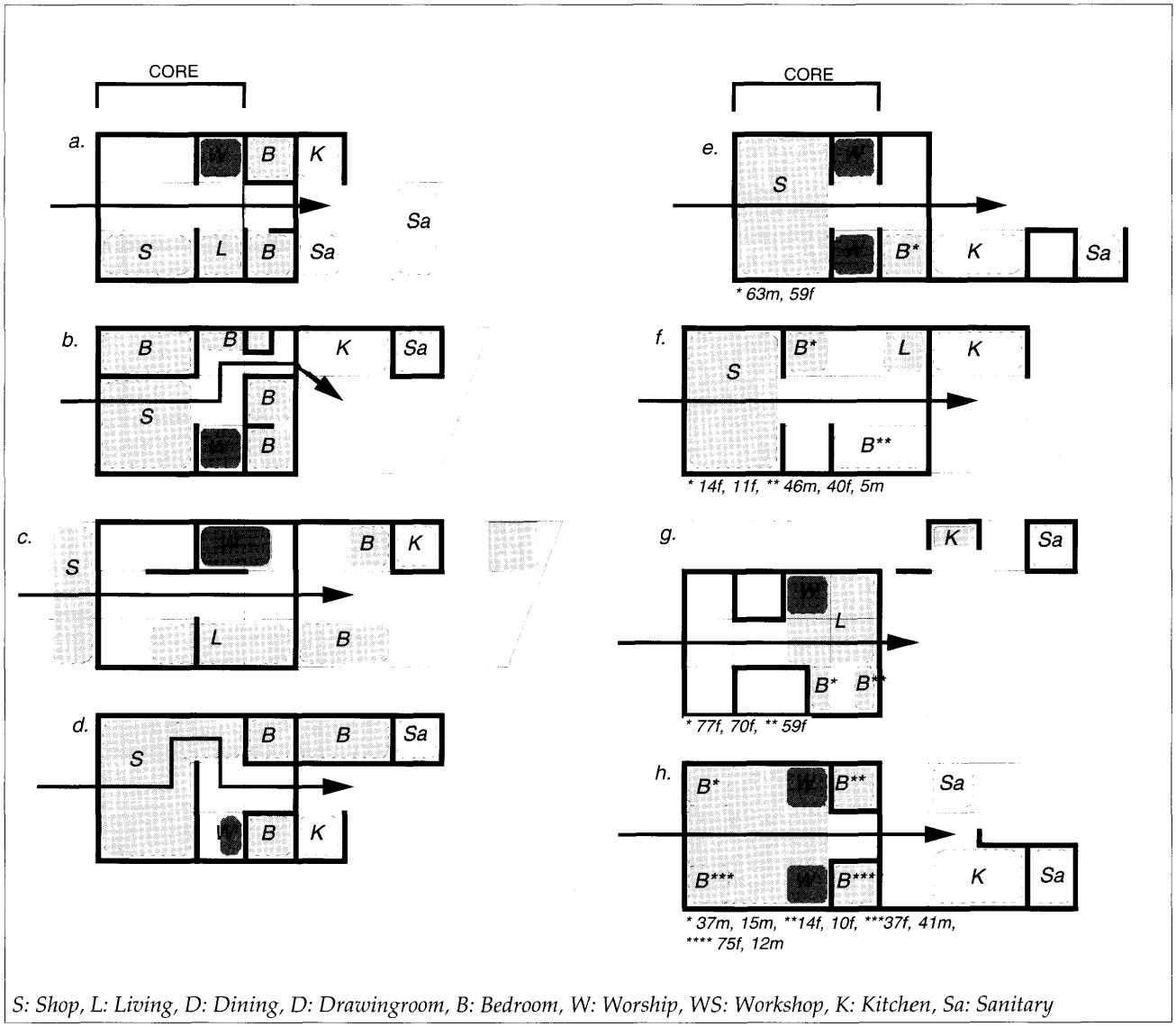


Fig. 11.4: 前家（1階建、子棟なし）［1+0型］における住み方

11.2.c. 前家（1階建て、子棟つき）における住み方

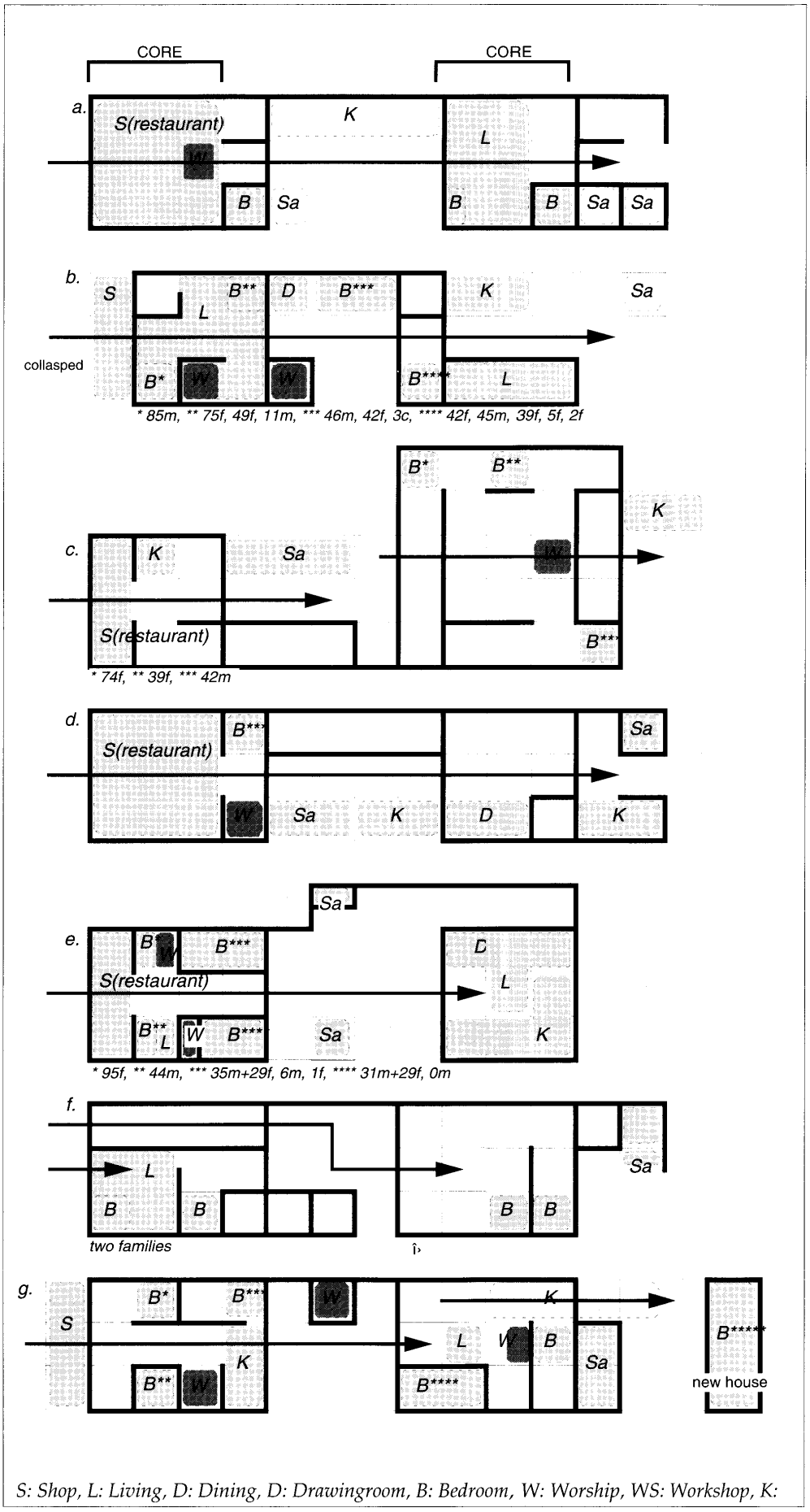
1. 店を営む場合、第1および第2スパンが店に使われている。1+0型より広くなるが、子棟がある分余裕があるのであろう。第3スパンには祭壇、居間が配置される。子棟は就寝の例が多い。中心に動線が取られ就寝空間は両脇に寄せられるが、視線を妨げる程度の間仕切りを設けている例が多い。庇が通り側に1間あってそこが室内化している例では、店と生活空間の間に間仕切りを置き、第2、第3スパン及び子棟の計3間が生活空間にあてられている。この場合この3間における生活の仕方は、1+0型で店を営まない場合の家の使い方と似ている。すなわち、コーナーに就寝空間がとられる。この場合、ふたつの就寝コーナーが対角線上に配置されている。また、主人はここでも中庭近くのコーナーで就寝している。2世帯居住はこの建築タイプにはなかった。
2. 店を営まない場合は、基本的には1+0型と同じになる。ただ奥行きがある分、就寝空間をよりはなして配置することができる。実例では3世帯居住もなされているが橋家には就寝空間はおかず、4隅の就寝空間のうち子棟の2つのコーナーを個室にしている。通りから遠く中庭に近い子棟の個室に就寝しているのは、主人と長男世帯である。祭壇は第3スパンに置かれる。このことは昔のこの形式の住宅での祭壇配置（前に示したTP48の配置）を踏襲している。
3. 食事、台所、水場に関しては1+0型と同じ。
4. 4世帯以上の家族が居住している例はなかった。



Flg. 11.5: 前家（1階建て、子棟つき）［1*+0型］おける住み方

11.2.d. 前家（1階建て）+後ろ家（1階建て）における住み方

1. 店を営む場合、同じ住宅型でも家族構成によって店の広さがかなり異なっている。1世帯又は2世帯の場合、通りから奥行き3間つまり前家の親棟



S: Shop, L: Living, D: Dining, D: Drawingroom, B: Bedroom, W: Worship, WS: Workshop, K:

Fig. 11.6: 前家（1階建）+後ろ家（1階建）［1+1型］における住み方

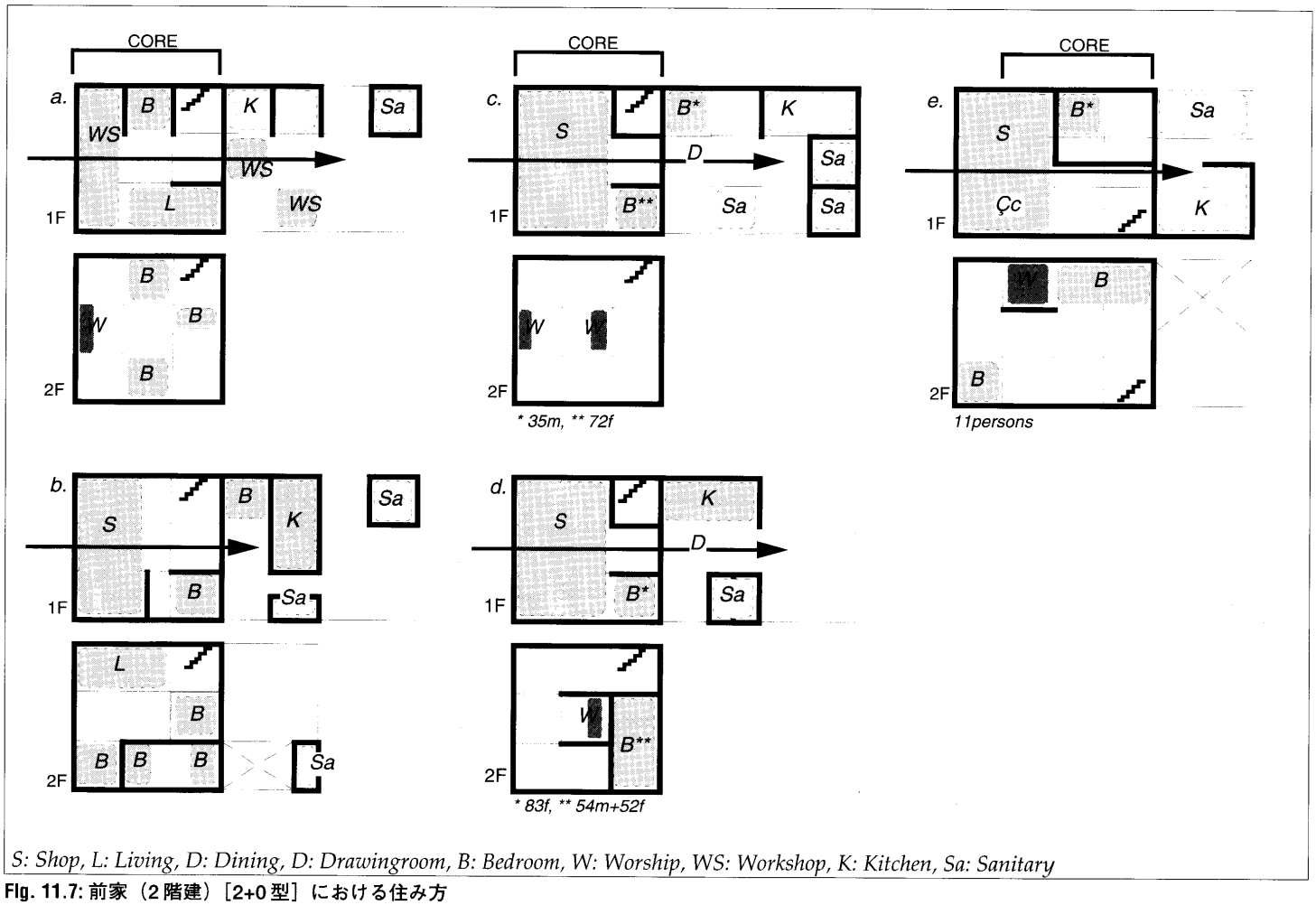
全てが店に使われている。この場合、子棟は祭壇または就寝空間だ。後家は第１および第２スパンが居間兼食事室として使われ、第３スパンは就寝空間に使われる。前家子棟と後家の第３スパンという２つの就寝空間が中庭と居間を挟んで配置されることになる。中庭が世帯又は親子の就寝空間を分ける機能を持っている。居住者が少なくても前家に就寝空間を配置しないで後家に就寝空間を集めることはほとんどない。

3世帯以上の例では、店の奥行きは1間ほどである。余裕が乏しくなるようだ。前家の第２、第３スパンおよび子棟は応接を含めた就寝空間として使われる。全部で奥行き３間が生活に使えることになるが、ここでも1+0、1+0*型にみられたように、４隅に就寝空間が分けられる。子供を持つ世帯ではこの就寝空間は間仕切りがつけられ個室化されていた。１人の場合は個室化されない。前家に全ての就寝空間を集め、後家はもっぱら台所と食事室に使っている例があった。４隅に分けず対角線上に就寝空間を置き、残りの世帯は橋家、後家にまんべんなく配置される場合もある。この場合当然後家は就寝と食事が近い位置に配置されることになる。主人や長男世帯などの家族内での関係が上の人は前家に就寝空間をもつ。

2. レストランを営む場合は中庭に台所が置かれることも多い。
3. 店を営まない場合の事例はあまりないので住み方の傾向を読むことは難しい。
4. この型での最大世帯数は５世帯であった。

11.2.e. 前家（2階建て）における住み方

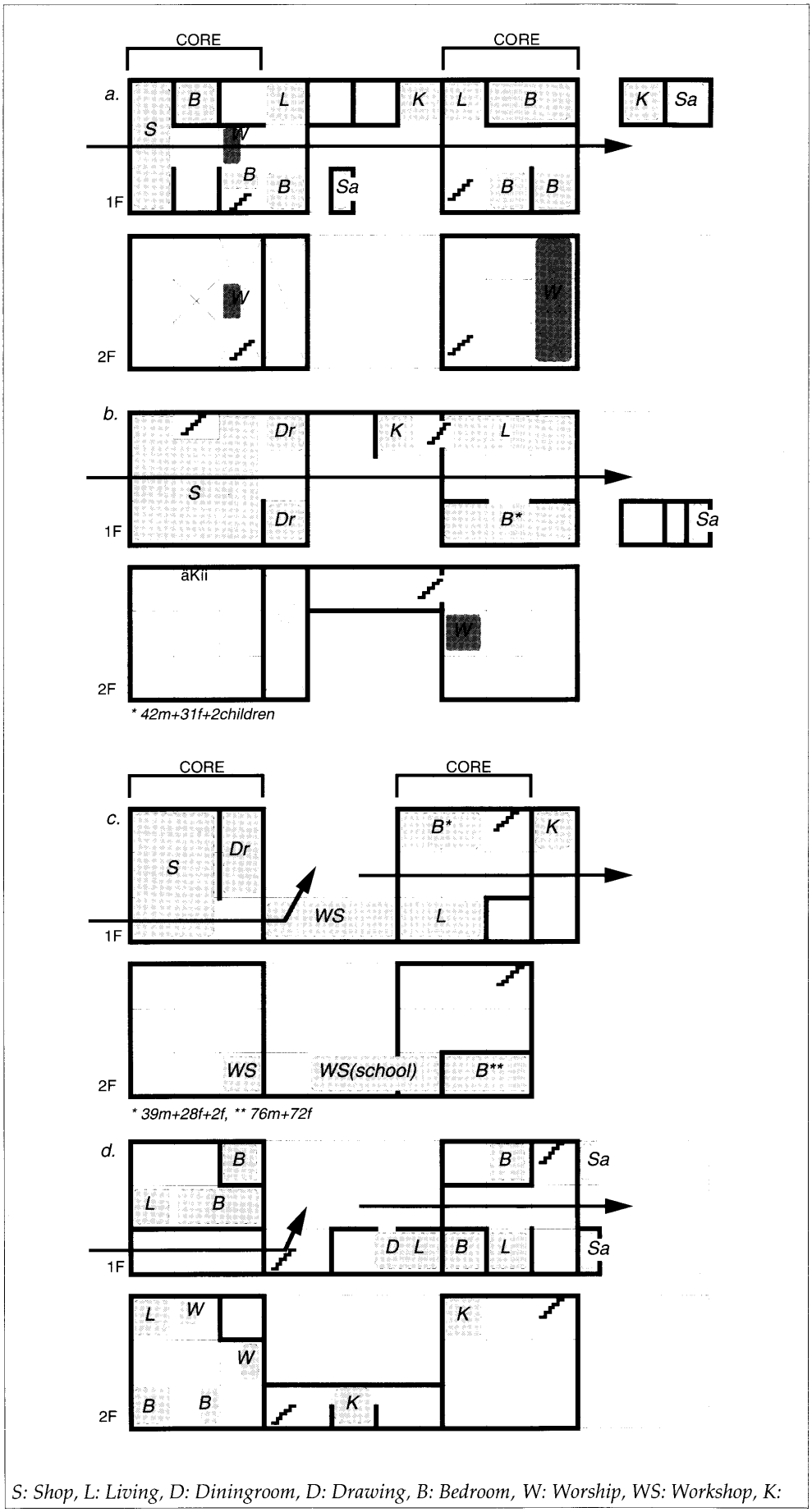
1. 店又は生産業を営む場合、仕事場は第１スパンのみ又は第１スパンおよび第２スパンに配置されていた。第１スパンだけを店に使うとき、居間は第２および第３スパンに取ることができるが、店として２スパン使用するときは、居間は２階に配置される。店の広さにかかわらず、第２、第３スパンのどちらかに必ず就寝空間があった。居住者が少なくても前家１階に就



S: Shop, L: Living, D: Dining, D: Drawingroom, B: Bedroom, W: Worship, WS: Workshop, K: Kitchen, Sa: Sanitary

Fig. 11.7: 前家（2階建）［2+0型］における住み方

寝空間をもたない例はなかった。一般的には主人の就寝空間が配置されるが、主人が自分の世帯と就寝するときには、広い就寝空間の取れる２階に配置される。１階に２つベッドが置かれている例はなく、ほかの人は橋家又は２階に就寝空間を配置する。２階を使うか橋家を使うかは、特に優先順位はない。２階ではなるべく距離をとって就寝するが必要に応じて一部



S: Shop, L: Living, D: Diningroom, D: Drawing, B: Bedroom, W: Worship, WS: Workshop, K:

Fig. 11.8: 前家（2階建）＋後ろ家（2階建）［2+2型］における住み方

分個室にする。

2. 専用住宅の場合、第1から第2スパンまでが居間として使われていた。第3スパンは階段のスペースと就寝空間に使われる。主人が一人で就寝するときは1階の第3スパンに配置されるが、世帯と就寝するときは、2階に配置される。
3. 祭壇は必ず2階に置かれ、特に四天柱の間、住宅の中央で最も高いところに置かれる。2階中央の窓際に配置されることもある。
4. 台所水場は通りから見て左側の屋外に小さな棟を構成して配置されることが多い（家番号が奇数番の場合）。
5. 階段は前家の第3スパンの通りから見て左側に配置されることが多い(家番号が奇数番の場合)。
6. 居住人数の最大は11人であった。

11.3.f. 前家（2階建て）+後ろ家（2階建て）における住み方

1. 店を営む場合で世帯が1～3世帯の時、前家は応接も含めて店空間に使われる。応接は前家の一番中庭側に配置される。このことはチョンズオンの子棟があってもなくても言えることである。橋家は台所に使われるが、後庭がある場合は後庭に配置されることもある。生活は全て後家で営まれるが、もし橋家が左側なら居間も左側の中庭側というふうに、居間は台所のある橋家近くに配置され食事室も兼ねる。就寝は居間と反対側の袖壁沿いに配置される。1世帯の場合このような1階のみの生活になり、2階は祭壇と物置だけに使われる。2～3世帯になると2階が使われるようになる。奥行き幅ともに3間あるので距離をとって就寝空間を配置するのが一般的だが、必要に応じて個室化される。2階は就寝空間としては使われるが、居間が配置されることはない。就寝空間が1階に配置されなくなることはない。生産業をしている場合は2階がそのための場になることはある。
   4世帯以上になると、後家に就寝空間を集めることは不可能になり、前家にまで生活空間が進出する。居間の位置に関しては3世帯以下の場合と同じ事が言える。
2. 店を営まない場合の生活は事例が少ないので一般原則を見出すことは不可能であった。
3. 祭壇は親棟の第3スパン即ち子棟の1スパン前に配置されることが多い。

11.2.g. まとめ

以上から、伝統的町家における現在の住み方で一般的に言えることをまとめると以下の通りである：

・前家では、店空間を除いた生活空間が奥行き2間の場合は、通り側から中庭側へ向かって、居間→就寝空間へ、つまり公から私へのヒエラルキーが形成される。店空間を除いた生活空間が奥行き3間の場合には、中央に居間を設けて、4隅に就寝空間が分散配置される。一般的には就寝空間を仕切るものは距離であるが、必要に応じて個室化される。伝統的住宅の場合、家屋規模の大小にかかわらず、この2点を基本原則として間取りがつくられている。

・2世帯以上で居住する場合、若い世帯は大きな棟ではなく小さな棟、例えば橋家などにその世帯の就寝空間を構える。

・前家と後家がともに2階建ての場合（2+2型）を除いて、前家に必ず就寝空間が配置される。その就寝空間が一つだけの場合は、主人の就寝空間が中庭近くに配置されるケースが多い。ただし、主人がほかの人と共に就寝する場合には、主人以外の家族が前家に就寝することもある。

・前家も後家も2階建ての場合には、居住者数が多くない限り前家1階には就寝空間を配置しない。しかし後家1階には必ず誰かの就寝空間があり、全員が2階というケースはなかった。

・中庭は、店と生活空間を分離する、世帯間の就寝を分離する、公私を分離

するなどの役割を果たしている。

以上が伝統的町家での住み方のパターンであるが、ここから次の２点が着目される。

第一点は、ホイアンの伝統的町家は実にさまざまな居住パターンを可能にしているということである。家族構成の変化に対しても間仕切り一つで間取りを変えられるといったパズルのような可変性をもっている。だからこそ時を経て存在することが可能であったのであろう。

第二点は、ホイアンの住宅は長い間人々の生活を守ってきたのと同時に、中で生活する人々もまた住宅を守ってきたということである。あまり間仕切りを置かずにできるだけ距離を置いて就寝空間を分けるという使い方は、暑いベトナムにおいて生活面における通風を考慮した方法でもあると同時に、住宅の木材部分の腐朽を防ぐ意味での通風も考慮した生活だった。まさに人と建築は共生してきたと言えよう。

この２点は、今後の近代化において、伝統的建物と現代生活との接点を見出すための手がかりといえよう。